

凡例

- 一、本資料の構成は、版下本に従った。すなわち、「本宗」「地冊没部」「地冊露部」は浄書本を、その他は、安永本をもととした。これは、梅園の最新の校本の組み合わせである。ただし、「地冊露部」には、安永本からの組み入れがあるので、すべてが浄書期のものというわけではない。
- 二、本資料は、返り点・送り仮名に従った「運為変錯の読み」（混成読み）である。
- 三、割り注形式の部分は、版下本と同じく、一段落ちとした。これは今日でもなお組版が困難であることによる。
- 四、本文のみならず図版も新たに作成し、初筆を復元し、図版の左右表裏は原著作を再現した。
- 五、初筆であっても、明らかな書き損じや転記ミスは訂正した。
- 六、漢字は極力原筆に近づけたが、原著そのものに文字使用の不統一がある場合は、もつとも頻繁に使われている文字に統一した。
- 七、本書には頁数がない。原著にないからであるし、どこから読み始めてもよいと梅園が書いているからである。

八、安永本まで用いられていた「岐」は、浄書本においては「歧」に改められている。梅園は、浄書期において、二分岐に「岐」の字を当て、多分岐に「歧」の字を当てるという考案をしたのである。したがって、「例旨」の「図有双岐」以外は、安永本であつても「歧」に改めた。安永本にも「岐」を「歧」に訂正した箇所があり、写本九三九も一貫して「歧」に改められていて、この文字に対する梅園の訂正意図が窺われる。これは浄書本初筆を安永本に適用した例である。

九、小動物類の名称は、分かりやすいように和名を付した。「度古」に「こうかいびる」というルビをつけた場合などである。「コウガイビル」でインターネットを検索すると、体長数十センチに及ぶ巨大なヒルのような生き物が見つかる。それが「度古」である。これを「度古」としたのでは意味が分からない。小冊物部「小物」の復元部分にこのような例が多数ある。

十、「者」がある場合は、ほとんどの場合、「なる者は」もしくは「する者は」と読んだ。末尾が「也」で終わっている場合は、そのように読まねばならない。なぜなら、これは『玄語』における語の定義の文型だからである。ただし梅園が、「者」の前に「ナル」や「スル」を付している場合は少ない。これは『玄語』の記述法を優先させた読みの例である。